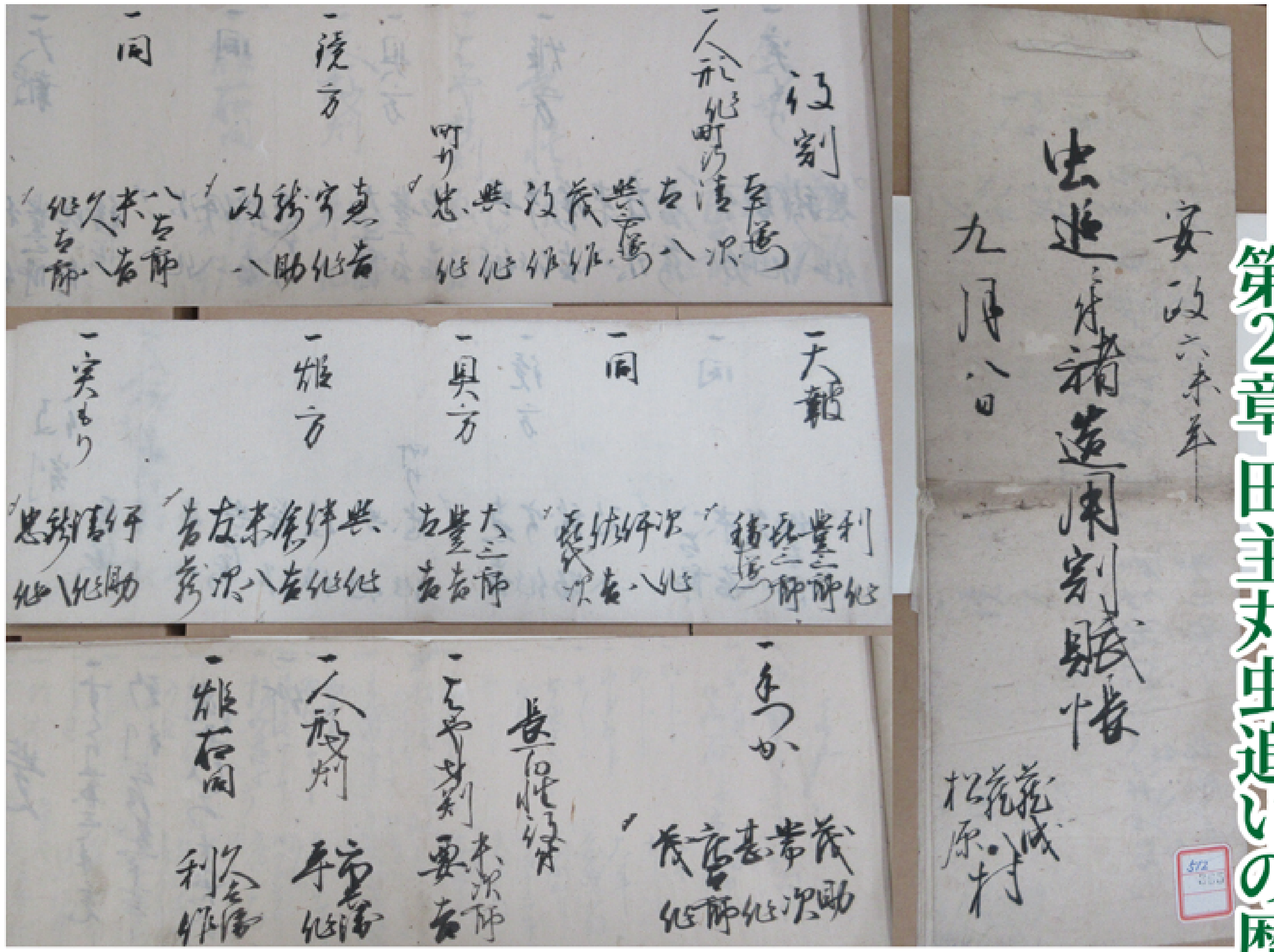
第2章 田主丸虫追いの歴史～江戸時代から昭和39年まで～

▼江戸時代の田主丸の虫追い資料「三浦家文書 安政6(1859)年」。複数ページを画像合成。A



■本来の虫追い

「宝永5(1708)年7月中旬以来、水害により米12万石分の損害、さねもり虫が発生、村々は何度も鐘・太鼓で虫追いをした」。

これは江戸時代の久留米の豪商が記した『石原家記』の一文で、久留米市の虫追いを記した最も古い記録と言われます。ここからも虫追いは稲に害を与えるさねもり虫(ウンカ)を追い払うのが目的だったことが分かります。そのため、虫追いは虫害の発生に応じて、藩の許可を得て不定期に行われていました。

虫追いは明治時代も続けられました。竹野郡蔵八村(くらはちむら。現田主丸町の蔵町・松原地区)の庄屋だった三浦家の日記によれば、明治3(1870)年・同14(1881)年に虫を駆除する油(おそらく鯨油)を田に入れると、その後間もなくして虫追いをしました。明治39(1906)年にも同様の記述が出てきます。

農薬が普及し始めるにつれて、虫追いの意味も変わってきました。昭和8(1933)年発行の『福岡土俗絵葉書(第十一輯)』は、口高(くっだか)地区の虫追いを紹介しています。そこには「古式によって豊年祝を兼ねた」とあり、写真の幟(のぼり)旗に「豊年祝」の文字が見えます。

一方、昭和15(1940)年10月8日に田主丸町の中心部(栄町二丁目・栄町三丁目・港町・村島・馬場の5地区)で行われた虫追いは、開催の理由を「虫多く行う」と記録されます。昭和初期は、害虫駆除と豊年祝いが混在する段階にあったと思われます。

その時期を過ぎると、田主丸町中心部では、虫追いは完全に豊年祝いの祭りとなりました。昭和30年代と思われる田主丸町教育委員会・田主丸観光協会発行の『虫追資料』は、その巻頭で虫追いを「豊年祝」とはっきり言っています。

現在、JAにじ田主丸地区青年部が行う虫追い祭りも稲の収穫が終了した11月開催ですから、豊年祝いの虫追いです。

虫追いを行う間隔も、昭和15年以前は5年以内で不定期でしたが、それ以降は昭和39(1964)年まで、定期的にほぼ5年ごとになりました。間隔の違いにも虫追いの意味の変化が反映されているのかもしれません。

『虫追資料』では、虫追いが豊年祝いである理由として、膨大な経費が必要で順当な収穫見込みがなければ実施されない、と説明します。引用された虫追い役割帳を見ると、明治43(1910)年は122人、昭和期は176人または205人に役が割り当てられています。膨大な経費が必要なのも納得できます。

そんなこともあってか、最後まで残っていた田主丸町中心部の虫追いも、昭和39年を最後に中断してしまいました。

その後、田主丸中央商店街の中町地区が廿日ゑびす祭りで「中町ゑびす虫追い」を昭和51(1976)年から10年ほど演技したことがありましたが、過去の規模には及びませんでした。

■『平家物語』由来のさねもり虫

冒頭の『石原家記』の一文も、稲の害虫のウンカを「さねもり虫」と表現しています。この呼び名は実は『平家物語』に由来します。

「さねもり」とは、12世紀末、加賀の篠原の合戦で敗れた平家の武将、斎藤別当実盛のことです。72歳という高齢の身で、実盛は味方の劣勢の中でただ一騎奮戦しましたが、最後に手塚太郎光盛に討ち取られます。『平家物語』は、その巻第七で「実盛最期」という一章を設けて実盛の勇姿を語ります。江戸時代には、人形浄瑠璃や歌舞伎の演目『源平布引滝』の三段目に青年時代の実盛と幼い頃の手塚が登場、「実盛物語」として人気でした。

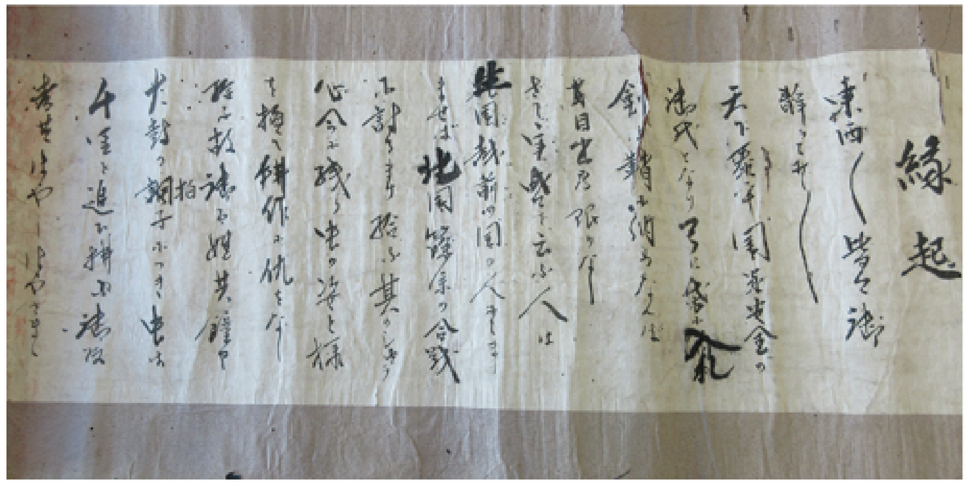
そんな武勇の誉れ高き実盛ですが、いつの頃からか、実盛が手塚に討たれたのは、実盛が乗る馬が稲の切り株につまずいたからで、実盛はそれを恨んで稲を食い荒らすウンカになった、という伝承が西日本を中心に広まりました。そこからウンカを「さねもり虫」と呼ぶようになったのです。

田主丸にも同様の伝承が伝わりますが、稲株につまずいたのは実盛自身、となっています。三明寺(さんみょうじ)地区の虫追いで読み上げられた『虫追縁起』にも、実盛は「稲田に足をとられ打ち死」となっています。

■虫追いに欠かせぬ松明と鐘太鼓

虫追いは全国各地にあります。一般的なやり方は、松明(たいまつ)を持つ村人が、虫の霊を移した藁(わら)人形や稲虫を入れた藁苞(わらづと)を中心に行列を組み、鐘太鼓を鳴らしながら田畑の道を巡り、最後に藁人形や藁苞を村境で焼き払ったり、川に流したりします。

▼大慶寺地区の虫追い縁起 (個人蔵)



田主丸でも、松明と鐘太鼓は必ず使ったようです。先に紹介した蔵八村庄屋の三浦家文書に、安政6(1859)年と文久元(1861)年の虫追い役割帳が残っていますが、そこにも人形とともに「鐘方」「太鼓方」「炬(たいまつ)方」の役が書かれています。

松明は害虫を火に寄せ集め燃やすためで、虫追い本来の目的に沿ったものです。

松明は大量に用意されました。明治43(1910)年、田主丸町中心部5地区の虫追いでは約700本を準備するのに、農家は耕作面積に応じて、農家でない家は1本ずつ、松明の数が割り当てられました。松明は行列が回る道々に置かれ、灯した松明が短くなればそこから取って交換しました。

夜の松明行列は、人形を先頭に「吐普加美依身多目(とほかみえみため)」などと書かれた赤白の幟旗が掲げられ、大人は「田の虫やホーイ、ホイ」と連呼し、子どもは小さな藁人形を竹に挿し「テッカン太郎が追いえた、実盛虫やホーイホイ、実盛虫やゴーシンダ」と唱えながら田んぼ道を廻ったそうです。そこに鐘太鼓の音も加わりました。

嘉永2(1849)年8月、久留米藩の郡奉行・木村三郎が農作物の出来を調べに村々を廻った際、庄屋に「虫追いに鐘太鼓は無用では」と聞くと、「鐘太鼓の音で地面の虫が飛び上がり松明の火で焼け死ぬ」と答えた、と木村は『廻村書留』(『久留米郷土研究会誌 第25号』、1997年)に書き残しています。

同じ記録から、当時の虫追いは村単位で、それも日を置かずに実施されたことが分かります。木村が「村々が次々と虫追いを願い出るのを控えてはどうだ」と言うと、庄屋は「一村だけで虫追いしても、周囲の虫が火を目掛けて飛び集まり、かえって虫が増えてしまう。村々が一斉にやらなければ駆除できない」と答えたそうです。

結局、その年は虫害があまりに大きく、竹野・生葉(いくは)・山本の三郡全てから虫追いの願書が出され、藩は即座に許可、村々は残らず虫追いをしました。

▼虫追い行列(昭和30年代) 。大馬の後ろに実盛・手塚人形。B

「虫追いをすると年貢の減免になるから、虫追いは減免(上納米こぎり)も目的だった」としばしば言われます。しかし、減免はあくまで結果であったと思われます。木村三郎のような役人が詳しく調査しますから、不作でもないのに虫追いを願い出るのは難しかったのではないでしょうか。